

機関番号：43605

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530760

研究課題名 (和文) 保育者の「気づき」と「配慮」の深化過程に関する研究

研究課題名 (英文) A Study on the difference in the novice teachers' and expert teachers' "awareness" and "consideration" of childcare activities.

研究代表者

山口 美和 (YAMAGUCHI MIWA)

上田女子短期大学・幼児教育学科・専任講師

研究者番号：80465856

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、保育者の経験年数による「気づき」と「配慮」の変化を明らかにすることを目的とする。保育場を記録した映像及び相互作用記録（プロセスレコード）の分析等から、新人保育者は、保育実践の具体的な計画や方法に関心を持ち、保育者の意図した活動に参加しない子どもを否定的に捉える傾向があるが、経験年数が長くなるにつれ、子どもの育ちを長期的な展望で見、活動に至るまでのプロセスや、目に見えない子どもの内面を推測しようとする傾向が強いことが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this research is to clarify how nursery teachers' "awareness" and "consideration" change as they grow. As the result of analysis of the VTR in which the childcare activities were recorded and of the process record, the followings were revealed: novice teachers tend to be interested in the teaching methods of particular childcare activities and tend to see as the negative the children who are reluctant to participate in the activities proposed by teachers. The expert teachers tend to evaluate child's development in the longitudinal perspective and tend to infer the innate process of carrying out the activities and covert aspect of child's mind.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：保育者養成・リフレクション・プロセスレコード

1. 研究開始当初の背景

平成12年4月に施行された幼稚園教育要領および保育所保育指針では、園生活の中で「幼児の主体的な活動」が自由に展開されるための条件として、「環境を通しての保育」

を掲げている。子どもの育ちを保障するため、幼稚園教諭や保育士（以下、保育者とする）は、子どもの興味関心に働きかけ、またその中で子ども自身が主体的に活動できるような魅力ある環境構成及び子どもの発達や興

味に応じた「配慮」の能力が求められている。

しかし、実際の保育場面において、子どもの興味関心に合った配慮や援助は、新人保育者にとって難しい課題である。ベテラン保育者と新人保育者とのあいだでは、同じ場面に遭遇しても、そのときの子どもの動きやことばから読み取ることのできる意味の豊かさや情報量の多さにおいて、大きな違いがある。保育実践場面で「気づき」と呼ばれている保育場面の読み解き方の差が、環境構成や援助といった「配慮」の質の相違を生んでいるとすれば、その差はどのようなものか、保育者が経験を積み豊かな「気づき」の能力を獲得していくということは、具体的にどのような「見え方」「読み解き方」ができるようになることなのかという視点からの事態の解明が必要である。本研究は、以上のような問題意識と着想に基づき、プロセスレコードおよびエピソード記述の分析により、保育者の「気づき」が「配慮」へと結びつくまでの思考過程を明らかにすることを目的とするものである。

2. 研究の目的

本研究は、保育場面におけるプロセスレコード及びエピソード記述の分析を通して、保育者が専門的職業人として熟練していくにつれ、保育者の視点からの「気づき」と「配慮」がどのように深化・精緻化されていくのかを明らかにすることを目的とする。保育者の視点から実践をふり返り相互作用を記述するプロセスレコード及びエピソード記述という記録方法を活用し、新人保育者（保育者養成校の学生）とベテランの保育者（幼稚園教諭・保育士）の記録を比較分析することによって、経験年数による保育場面の解釈の違いを明らかにするとともに、具体的な「援助」の背後に存在する「配慮」の様態の変化を示す。

4. 研究成果

(1) 保育場面における実習生の気づきと対応—プロセスレコードの分析を手掛かりに—

本研究の第一段階として、実習生と子どもとの相互作用場面を記録した「プロセスレコード」を研究素材とした調査分析を行った。

データの収集は、幼稚園教諭及び保育士養成課程を有するU短期大学及びF大学（いずれも女子校）において、学生が経験する第1回目の実習（両校とも幼稚園における教育実習）が終了した時点で行なった。第1回目の教育実習は、U短期大学では1年次の夏期休暇中（8-9月）、F大学では2年次の夏期休暇中（9月）に実施されており、プロセスレコードは実習の事後指導（後期に実施）の際に記録・提出された。

収集された「プロセスレコード」の総数は、U短大94ケース、F大学111ケース、合計205ケースである。うち、学生が子ども同士の対立に介入した場面を取り上げた158ケース（U短大71ケース、F大学87ケース）を分析の対象とした。

プロセスレコードの記録にあたり、学生には、①実習中、子どもとのかかわりの中で、対応に困ったり戸惑ったりして特に印象に残っている場面を取り上げること、②子どもとのかかわりが開始されたきっかけとなる言動から書き始め、時系列に書き進めること、③かかわりの最中に自分が考えたり感じたりしたことをありのままに記入すること、等の指示が与えられている。

分析対象となったケースに登場する子どもの所属クラス（学年別）の構成は以下の通りである（表1）。

【表1 子どもの所属クラス別内訳】

	年少	年中	年長	混合	合計
U短大	19	22	17	13	71
F大学	25	24	25	13	87
合計	44	46	42	26	158

学生がプロセスレコードに取り上げた介入場面のうち、最も多かったのは「遊具や物の取り合い」の場面であり、続いて「仲間はずれ」、「友だちを叩く、蹴る等（意図的な攻撃）」、「順番やルールを守らない」等の場面が多かった。

【表2 学生が介入した場面】

場面	年少	年中	年長	混合	計
遊具や物の取り合い	19	14	10	8	51
仲間はずれ	8	4	9	3	24
叩く・蹴る（攻撃）	7	7	7	3	24
順番・ルールを守らない	1	6	5	1	13
ぶつかる（意図せず傷つける）	2	3	2	2	9
意見の対立・不一致	0	4	3	1	8
言葉による攻撃	3	0	2	1	6
保育者の独占	2	0	2	1	5
席の取り合い	0	2	1	2	5
その他	3	4	3	3	13
合計	45	44	44	25	158

プロセスレコードに取り上げられた場面の分析から、学生が実習中に介入を行なうのは、遊具の取り合いや仲間はずれ、ケンカなど、子ども間に生じたトラブルを仲裁する場面が多いことがわかる。

介入する際、学生は、子どもにきちんとした「解決」を示さなければならないと考える一方で、個々の子どもの思いにできるだけ寄り添いたいという志向も持っている。子どもの利害が対立する場面では、「解決」のための基準を明確に示せば、一方の側の行動を断罪してしまう可能性があり、双方の子どもの立場を尊重すれば、葛藤を解消することが難しいというジレンマに立たされる。二つの志向を同時に満たしながら問題解決を図ることは難しく、学生は、うまく対応できなかったという思いを持ち、戸惑いを覚える傾向にあることがわかった。

年少・年中児と比べ、年長児の事例に対しては、相対的に学生側から介入する事例が少なくなっていく特徴がある。年長児の場合には、子ども同士での解決がある程度可能であることや、子ども側から必要に応じて保育者の助けを求めてくるため、保育者が積極的にイニシアチブを取って介入しなければならないケースが減り、このような結果が出たと考えられる。

学生が介入した場面においては、子ども同士のあいだに何らかの対立や利害の衝突が生じているが、衝突を惹き起こした原因を、主に公平性や正義が守られないことに帰するか、友だちへの配慮や思いやりが足りないことに帰するかで、二通りの問題構成の仕方が見られた。これらは、子どもの行動に対し、道徳的な善悪の判断を保育者が下す際に根拠となる倫理原則の代表的なものであると考えられる。

「公平性・正義」と「他者へのケア」という学生が利用する二つの倫理原則は、コールバーグの道徳性発達区分においては慣習的段階にあたる。本発表で「公平性・正義」と名づけた倫理原則は、法律や秩序に従うことを重視する第4段階にあたり、後者の「他者へのケア」の倫理原則は、集団におけるよりよい人間関係を維持するために、周囲の人に喜ばれたり認められたりすることをしようとする第3段階に合致する。

多くの学生は解決にあたり、「他者へのケア」の倫理原則を選択し、「相手の気持ち」を考えさせるといったらきかけをする。全員が守るべき社会のルールや公正さを説明する際にも、「相手の気持ち」を経由して子どもに理解させようとする傾向があった。

総じて学生は早く問題解決を図り葛藤を解消しようとする傾向があり、子ども自身が考えたり交渉したりするのを待つよりも、子

どもに謝罪させるなどの直接的な働きかけを行ないがちであることが見えてきた。

(2) 保育者の経験年数による保育場面解釈の相違—保育場面の映像に基づく保育者への調査から—

本研究の第二段階として、経験年数の異なる幼稚園教諭や保育士（以下、「保育者」とする）が、保育場面をどのように観察し、解釈する傾向があるのかを明らかにすることを目標に質的調査を行った。保育場면을映したDVDを、保育者に視聴してもらい、エピソード記録に基づく質問紙調査（自由記述方式）を行った。

事前に1名の保育者及び3名の学生への半構造化インタビューによるプレスタディを行い、その結果をもとに自由記述からなる質問紙を作成した。保育場면을記録した映像を保育者及び保育者養成校の学生に視聴してもらったのち、質問紙に回答してもらい、保育経験年数の違いによる解釈の違いを析出することを試みた。

保育者群：幼稚園及び保育所で勤務経験のある幼稚園教諭及び保育士10名

学生群：U短大幼児教育学科1年次生90名（うち10名を対象群として抽出）

標本は、すべての質問項目に関する回答について欠損のないデータを選び、その中から無作為に10名を抽出する層化抽出法を用いた。保育場面の映像は、N県内の幼稚園で2009年7月から2010年7月までの間に収集した以下の場面である

- ① 教育実習生（U短大2年次生）による一斉活動（設定保育）の場面
- ② クラス担任による一斉活動の場面中に発生した子ども同士のいざこざの場面
- ③ 自由あそび中の子ども同士のいざこざの場面。

データは、経験年数8年以上の群（ベテラン群）と、4～6年の群（中堅群）、1年未満（新人群）の群に分け、上記三つの保育者群に学生群を加えた4つの群の回答（自由記述）の文章を切片化し、切片に含まれる言葉を付箋に書き出して類似のものを集め、カテゴリ一名をつけて分類する手法（KJ法）を用いて分析を行った。

場面①では、学生及び新人保育者は、設定保育の導入の具体的な手法に言及し保育の実践方法に強い関心を向ける傾向にあった。また、子どもの姿に対しては、保育者の話を聴いていない、活動に集中していないといった否定的な解釈をしており、その原因が保育者の不適切な説明の仕方にあると解釈していた。これに対し、保育経験4～6年の中堅群の保育者は、保育者の実践に関わるスキルよりも、子どもの経験内容や活動の広がっていくプロセスに強い関心を示している。学

生・新人群は、活動のねらいや計画を前提としているのに対し、中堅群では子どもの育ちや経験の個別性を重視し、個々の課題を追求するかぎりにおいて活動がさまざまな方向へ向かってよしとする傾向が見られる。ベテラン群では、映像に現れない子どもの内面の変化に言及する回答が目立つ。この群の保育者の多くが、一見何のアクションも起こしていない子どもでも、何らかの内的経験をしているという解釈を示している。また、保育者に対しては見通しを持って子どもを待つ態度を求め、環境や素材の配置など、適切な教材提示のあり方にも目配りをしている。

場面2では、学生・新人群、中堅群、ベテラン群ともに、活動につまずいてしまう個々の子どもへの対応と、集団全体の活動の進行との両立に関心を示している。学生群では、保育者の対応方法や連携に、より強い関心が向けられる傾向がある。ベテラン群では、日頃の保育における子どもの特性の把握を重視する回答が目立ち、保育者の関わりはこの場面に限定された突発的なものではなく、事前の予測や想定が可能だという見解が見られた。

場面3では、学生群は、子どもの姿について、話を聴かない、譲らない、順番を守らないなど否定的な表現で記述する傾向があった。また、「子ども(というものは〇〇だ)のように、ステレオタイプにあてはめようとする表現も、学生・新人群では見られた。中堅群は、言い合っている児よりも、途中から仲裁に回った児への関心が高く、子どもの中から出てきた解決の方策を活かしたいという回答が目立った。ベテラン群は、この場面での言い合いをむしろ好ましいものだと捉える傾向がみられた。大人が介入せずに、子ども同士で思いをぶつけあい、主張し合うことによって、お互いの気持ちに気づくことができ、結果的に子どもを成長させるという解釈が提示されている。

以上の結果から、学生や新人保育者は、設定保育の場面においては保育実践の具体的な計画や方法に関心をもち同時に、保育者の意図した活動に参加しない子どもの姿を否定的に捉える傾向があるといえる。これに対し、経験年数が長くなるにつれ、子どもの育ちを長期的な展望で見る視点があらわれ、活動そのものよりもそこへ至るまでのプロセスや、目に見えない子どもの内面を理解しようとする傾向が強くなることも明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

山口美和「遊具の譲り合いの場面に見られる幼児期のケアの発動—ノディングズのケアリング論を手がかりとして—」『上田女子短期大学児童文化研究所所報』第31巻, 11-27頁, 2009年

山口美和「本学における教育実習Ⅰの事前事後指導体制について」『上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報』第6巻, 1-5頁, 2009年

山口美和「教育場面における言語行為の特質に関する予備的考察」『上田女子短期大学紀要』第34号, 119-129頁, 2010年

山口美和「幼稚園児同士のトラブル場面への介入における教育実習生の言語行為論的特質—実習生のプロセスレコードを分析対象として—」『乳幼児教育学研究』第19号, 49-59頁, 2010年

〔学会発表〕(計2件)

山口美和・若山哲「保育場面における実習生の気づきと対応—『プロセスレコード』の分析を手がかりに—」(日本乳幼児教育学会第19回大会 於:川村女子学園大学 平成21年11月15日)

山口美和・若山哲「保育者の経験年数による保育場面解釈の相違—保育場面の映像に基づく保育者へのインタビューから—」(日本乳幼児教育学会第20回大会 於:関西学院大学聖和キャンパス 平成22年10月)

〔図書〕(計1件)

山口美和・若山哲『平成20年度~22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 保育者の「気づき」と「配慮」の深化過程に関する研究』2011年, 81頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 美和 (YAMAGUCHI MIWA)
上田女子短期大学・幼児教育学科・専任講師
研究者番号：80465856

(2) 研究分担者

若山 哲 (WAKAYAMA TETSU)
福岡女学院大学・人間関係学部・講師
研究者番号：20352817

(3) 連携研究者

()

研究者番号：